

下乗石

この石は、馬に乗って到着した参詣者や訪問者が徒歩で寺に向かうため馬から降りるべき地点を示したものです。公家や大名でさえ、旅の最終の部分はかごから降り自分で歩くことになっていました。慈尊院は高野山の伽藍への玄関口とされていたため、自分で歩くことは空海（諡号 弘法大師、774-835）に対する敬意の表れと見なされていました。

平安時代（794-1185）に最初に造られた時、高さおよそ3メートルのこの石柱は紀の川の近くにおかれていました。残存するのは、1540年に川が氾濫した後に回収された石柱の一部のみで、この部分は慈尊院入口正面の現在の場所に移されました。